

中国理解を図る教育活動の展開

前天津日本人学校 教諭

熊本県多良木町立多良木小学校 教諭 宮原しのぶ

キーワード：現地理解，日中交流

1. はじめに

中国の魅力は計り知れないほどあるにもかかわらず、児童生徒たちは中国の良さに触れ合う機会が少なく、中国の生活に対する不平や不満などを口にすることが多い。周囲の限られた情報から中国に対するイメージを判断してしまう児童生徒たちにとっては、中国の良ささえも、中国を蔑視する材料となっている時がある。こういった実態から、学校教育の場で中国理解を図る場を意図的に設定していくことで、児童生徒の中国に対する見方や考え方が友好的に変容していくのではないかと考えた。親に渋々連れて来られたという思いから、中国を好きになり、「天津日本人学校で学んで良かった」と思える児童生徒が増えればと考える。

2. 研究の目的

体験学習や授業を通して、中国の良さに触れ合う機会を多く設定し、生徒自身の中国理解を深め、中国に対する意識改善を目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 中国に関わる作品作りを通して、中国を多面的に見る視点を養わせる。
- (2) 体験学習を通して、日本と中国の文化の多様性に触れさせる。

4. 研究の内容

- (1) 中国に関わる作品作りを通して、中国を多面的に見る視点を養わせる。

①修学旅行での旅の短歌作り

修学旅行では、毎年、旅行中に感動したことを短歌に表現させた。中国での感動を短い言葉に表現することで、その感動はさらに増し、また中国の良いところやおもしろいところを見ようとする目を養った。

②中国に関連させた長期休みの課題設定

夏休みや冬休みの作品制作では、中国に関わる課題を出していった。与えられた課題に対して熟考し、自分が何を訴えたいか答えを見い出さなければ、相手に伝わる絵はなかなか描くことは難しい。生徒たちにとって課題に対する作品制作は、中国を色んな視点で見て考えなければいけないことを示唆したと考える。

課題は、長期休みの1ヶ月ほど前に与え、授業で課題の説明をした。課題から思い浮かぶ言葉をブレインストーミングをして生徒たちに挙げさせた。その中から、特に訴えたいことや表現したいことをいくつか絞り、その言葉のイメージにあう画像をインターネットの画像検索や本、雑誌などを使って集めた。そ

【生徒の作品より～短歌～】

・蘇州のピサの斜塔 ここにある 今も倒れず 立っているよ
・南京の とても大きな南京橋 底は見えない 長江かな
・リニモ乗り まだ見ぬ景色を 発見だ 四百キロの 新しい世界
・南京で 平和について 考えた この折り鶴で 世界を変えよう
・南方の いろんな文化 体験し 新たな自分 作っていくかな
・南京へ ごめんなさいと 言いたいな 仲良くしていこう ともに未来へ
・森ビルは たかい たかい たかい たかい 周りを見れば すべて絶景

の後、イメージに合う画像をしばりこみ、絵のレイアウト作業に入っていた。一番表現したいことが目立つように構図を考えさせて下絵を描き、長期休み中に仕上げるように進めていった。長期休み後、下絵とは異なる作品ができることもあったが、休み中に生徒の中で思いが膨らんだ作品となっていた。

【3年間の課題一覧】

「天津」、「日本と中国の架け橋」、「躍動する魂」、「天津と虎」、「校歌の歌詞のイメージに合うCDジャケットのデザイン」、「天津と私」、「交流」、「未来への躍動」、「新年への希望」、「新たな挑戦」、「手紙～拝啓 十五の君へ～」、「感謝」、「震災からの復興」、「修学旅行」、「平和な世界を目指して」、「明日をつかめと龍」、「希望と龍」、「絆と龍」、「美を求めて」、「特別に心ひかれるもの」、「自由な心で」



【「天津」生徒の作品より】

作品制作は、課題を自分の中に取り込んで解釈し、そこから自分の考えを構築していかなければ表現したい形にはならない。課題に取り組むことで、色んな視点から中国を眺め、自分の中で課題に対するこたえが構築されていったと考える。

③美術科授業での取組

天津市内のスーパーや名産品が売ってある古文化街では、篆刻をよく見かける。生徒たちの中には篆刻の文化に触れ、自分でも彫ってみたいという生徒が多い。修学旅行で上海博物館を訪れた際にも、館内の印鑑を展示してある場所に興味をひかれて見学した生徒が多かった。

中学3年生の3学期の美術では、卒業記念に篆刻を行った。まず、上海博物館での古代印章を紹介し、古文化街の篆刻の職人さんの写真を見せ、印鑑の文化を説明していった。印字の美しさやデザイン性にも触れ、篆刻の魅力を説明した。その後、生徒は小篆、印篆、隸書、金文等から、字体を決め、自分の名前をデザインしていった。デザインした文字を葉蠟石に反転し、篆刻を始めた。葉蠟石は彫りやすく、生徒も世界に一つだけのオリジナルの印鑑を篆刻することができた。この印鑑は、卒業制作のキャンパスにも押印し、卒業記念となった。

また、美術の鑑賞の時間に、日本と中国にゆかりの深い平山郁夫の作品の鑑賞や彼の活動について学習を行った。平山郁夫は中国を描いた日本画家である。「大唐西域壁画」や「仏教伝来」など中国を題材にした多くの作品を残した。平山郁夫は創作活動以外にも、「文化財赤十字活動」の名のもとカンボジアのアンコール遺跡救済活動、敦煌の莫高窟の保存事業、南京城壁の修復事業、バーミヤンの大仏保護事業などの文化財保護や相互理解活動を評価されるなどその活動は幅広く社会への影響も大きい。学習後の生徒の感想には、「被爆が原因で白血球がなくなる病気にかかってしまい、抵抗力が弱まり絵も描けなくなっていたが、自分との戦いに勝ち、絵を描けるようになった。そんな平山さんなので、文化赤十字活動には熱い思いが託されていると思う。」とあり、平山郁夫の作品のみならず生き方に感銘を受けていた。平山郁夫の作品を鑑賞することで、美術による日中交流のあり方や中国を多面的に見る視点を養わせることにつながったと考える。美術鑑賞を行うことで、自分の作品の中にもその良さが生きてくる。

(2) 体験学習を通して、日本と中国の文化の多様性に触れさせる。

①文化体験や現地校との交流学习

1学期の体験学習では、それぞれ学年に分かれ中国文化に触れる体験を1日行った。小学3年生が泥人形作り、小学4年生が剪纸作り、小学5年生が餃子作り、小学6年生が少林寺拳法、中学1年生が揚柳青という中国画、中学2年生が中国茶、中国3年生が京劇を体験した。学年に応じて中国文化を体験できることは、子どもたちの中国

文化理解に大きく役立っていた。事前に調べ学習を行い、体験をし、その後まとめを行い、全校生徒の前で体験学習の発表を行っていった。

また、現地校の麗苑小学校との交流では、小学部がそれぞれ学年に分かれ、1年生は折り紙、2年生はカルタ遊び、3年生はフリスビー、4年生はこまと吹き絵、5年生は雑伎とクイズ、6年生は羽子板を麗苑小学校の児童と一緒に活動した。最後に、中学部は太鼓の演奏を披露し、日本人学校と麗苑小学校の子どもたちが一緒になって「世界に1つだけの花」を中国語と日本語を交えて歌った。

近隣の国際学校では、小学部1年生から中学部3年生まで全校児童生徒で、国際学校の小学部と折り紙作りなどの活動を通して英語を使ってコミュニケーションを図っていった。「ビューティフルサンデー」を全員合唱したり、体育館でボールゲームや人文字を作ったりした。

②修学旅行での取組

平成23年度の修学旅行では、初めて南京大虐殺記念館を訪れた。中国に住んでいるからには、歴史問題については避けては通れない。生徒たちの若い感性で中国でしか学べない戦争観を培ってほしいと願い、事前に担当教員で下見を行い、学習計画を立て修学旅行にのぞんだ。

まず、広島「原爆この子の像」のモデルになった佐々木禎子さんについて学び、戦争で失われる命の重さについて考えていった。原爆による白血病でわずか十二歳で亡くなった禎子さんは、闘病生活の間、鶴を千羽折れば元気になると信じて折り続けたが、願いは叶わなかつ



【南京大虐殺記念館で献花・千奉納羽鶴】

た。亡くなった後、同級生たちによって、平和の像をつくる呼びかけが広まり「原爆の子の像」がつくられた。このエピソードがモンゴルに伝わり、モンゴルの歌手オユンナさんにより「ヒロシマの折り鶴」としてモンゴルで歌われるようになった。次に、戦争について書かれた資料の「あなたがたの死を、決して無駄にしません…」という言葉にどんな思いが込められているのかを生徒たちが語り合いながら、戦争について考えていった。「戦争とは何か」という答えはすぐにはみつからないかもしれなが、その問いを持ち続けてほしいと思った。

学習後、生徒たちは平和への願いを込めて、折り鶴を折り、南京へ千羽鶴を持って行った。南京大虐殺記念館は、生徒たちにとっても衝撃の大きい場所だったに違いないが、ここで戦争について考え平和への願いを心に刻んだことは、今後、大人になり日中の架け橋となる生徒たちにとってはとても貴重な体験になったと思える。生徒たちは、中国に住んでいなければ学べなかった戦争についての視点を学ぶことができたと思う。中国の歴史的背景を知ってこそ、お互いにわかり合える。南京大虐殺記念館の中に「過去の苦難を忘れたら未来に災禍を招くかもしれないと信じている」「歴史をしっかり覚えよう。しかし、憎しみを覚えてはならない」という中国の方の言葉があった。それらの中国の方々の思いやメッセージを受け取ることが友好をつくっていくものとなる。

今回の修学旅行では、「中国の歴史や文化を体験し、今後の日中関係について考えよう」をスローガンに取り組んできた。その中で、例年の修学旅行では含まれなかった南京大虐殺記念館を訪れた。デリケート過ぎる場所なので訪問する私たちも非常に緊張した。しかし、ここで学んだことは多い。このことは、今後の生徒の生活でも生きてくるものと思われる。

③日本企業での職場体験を通して

中学2年生の総合的な学習の時間に、9月に1日職場体験学習を行った。「将来の自分の生き方について考える機会をつくり、進路選択できる力や将来社会人として自立できる力を育てる。働く大人の生きざまに触れる。体験学習を通して、課題意識をもち前向きに取り組む自分をつくる。勤労の意義についての考えを深め、自分の適正や能力などを改めて考え、自己理解を深める。」ことを目標に1学期から準備を進め、9月7日の実施となった。できる

だけ生徒の希望に応じて事業所を開拓するために、まず、全校生徒の保護者へ受け入れ事業所のアンケートを行った。ただ、受け入れ事業所も、日本人スタッフ（または、中学生に対応できる方）に対応できる事業所、生徒の安全を確保していただける事業所、「見学」ではなくできるだけ「体験」を多くできる事業所という制限を設けてのアンケートを行った。そのアンケートにこたえてくださった事業所や職場体験受け入れ要請に応じてくださった事業所から、生徒たちは職場体験の場所を選んでいった。

平成23年度も中学2年生16名がそれぞれ7事業所に分かれ、職場体験を行った。さくら幼稚園、JIN（日本人向けマガジン）、JAL、ANA、ヘアガーデン（美容院）、パナソニック、大塚製薬に生徒たちがお世話になった。どの事業所も、生徒たちのために様々な体験活動を用意してくださった。JINでは、取材と雑誌の編集を体験することができ、自分たちの書いた記事が次号の雑誌に載り、生徒たちもできあがった記事を見て雑誌作りの醍醐味を感じることができたようだった。

事業所の方々からも「単純作業でもその仕事には意味があり、忍耐力も必要であることも身をもって体験できたと思います。」「通常ななか立ち入ることが難しい施設の見学に生徒も緊張感を持って望んでいました。」「自分が初めて仕事に就いた時のことを思い出しました。私も初心に返って良い経験になりました。」と好意的な感想を頂いた。

海外で職場体験活動を行うことには、事業所の協力体制がないと安全面等でも厳しい面がある。しかし、「天津に住んでいる子どものためにできることを」という思いで企業の方々の協力が続いている。生徒たちも職場体験活動を通して、現地で働く日本人の姿を見ることができ、幅広い視野で職業について学ぶことができたと思う。

5. 研究のまとめ

(1) 中国に関わる作品作りを通して、中国の美しいところを探す姿勢や多角的な視点で中国を俯瞰しようとする姿勢が身についた。短歌や俳句作りを通して、中国のよいところや面白いところを発見しようという前向きな姿勢が身についてきた。また、作品を通して、驚きや感動を生徒たちが共有することができた。中国を描いた画家の作品や生涯を学習したことを通して、生徒たちの中国と向き合う姿勢が変容しつつある。印鑑作りを通して、漢字の書体の種類の豊富さに触れ、中国文化の素晴らしさを実感できた。

(2) 同世代の中国の生徒や中国に住む外国の生徒との交流を通して、国際人としてどう生きるべきか考える示唆を得た。中国と日本との戦争の歴史を多面的にとらえることができた。職場体験を通して、中国で活躍する日本企業の実益外交に触れ、中国や世界でこれからどう活躍していけばよいかの示唆を得た。

6. おわりに

生徒が天津日本人学校で学んだという事実は変わらない。そうであれば、どれだけ中国を理解し、受け入れ、中国のいい面をたくさん吸収し、その後の人生にプラスにしていくかが生徒のためにも、ひいては日本や中国のためになる。長い期間でも、わずかな期間でも、この天津で学んだことが誇りになるように、周囲の大人たちが中国での生活をプラスに変える環境作りをすることが大事である。今回の取組で、その一助になれたのではないかと思う。

今年は、日中友好40周年の節目を迎える。日本と中国との友好関係をさらに発展させるためにも、この天津で学んだ子どもたちが中心となって、日中の懸け橋になってくれることを心から願っている。